

いよいよ始まる薬学教育初の共用試験

来年5月からの実務実習の実施を前に、12月から来年3月にかけて、薬学教育史上初の共用試験が実施される。共用試験は、6年制の薬学教育課程の学生が実務実習を始める前に受ける試験。全国の国公私立薬科大学・薬学部が共通で利用する評価試験。そのため、共に用いることから共用試験と呼ばれている。薬学の世界では初の取り組みだが、関連領域では医学・歯学系が先行、既に2005年から取り入れられている。コンピュータを用いて基本的知識を問う客観試験（Computer Based Testing：C B T）と、医療現場での態度・技能を評価する客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：O S C E）からなる。その運営・実施を担っているのが06年に設立された「特定非営利活動法人・薬学共用試験センター」だ。

長期実務実習を来年に控え準備進む

共用試験が実施されることになったのは、6年制による新しい薬学教育が、実務実習の充実を図り、学内における1カ月の実務実習事前学習の後、病院および薬局における各11週の長期実務実習を必修科目としたことに端を発する。その結果、求められる実務実習は、従来の短期・見学型から「参加型実習」へと大きく舵を切った。

実務実習の現状をみると、08年3月卒業の薬学生では、病院実習（通常4週間）を受けたのが1万0719人、薬局実習（通常2週間）は7761人。08年度の全薬学生は定員レベルで約1万3000人で、単純比較すると、薬局実習経験者は6割程度で、病院実習に比べても、現状では、かなり少ない状況にあることが分かる。

今後は、医学生同様に資格を持たない薬学生が、医療現場で薬剤師業務を「参加型」で学ぶことになる。そのため、薬学生が行う参加型実務実習も、薬剤師法及び関連法律に照らして適法性があり、かつ薬剤師教育としてふさわしい内容になっていることが必要となる。それには、受け入れ機関及び患者や医療スタッフの理解が必須で、加えて実習に出る学生が薬学の専門知識や技能、態度が一定レベルの状態にあることが“要件”となる。そこで、学生の能力と適性について、全国的に一定水準を確保するための、全国共通の標準評価試験が必要となる。

共用試験については、06年10月に全国薬科大学長・薬学部長会議のもとに設置された薬学共用試験センターが、薬学共用試験の問題管理と受験管理システムの構築を担い、08年度までにシステムの基盤作りを終えた。一方、C B T試験問題は、日本薬学会大学人会議のもと、全薬学系大学の教員が主体となり、日本薬剤師会、日本病院薬剤師会の協力を得て、

07～09年にかけて作成された。作成された候補問題は、旧4年制の薬学生を対象とするトライアル試験で、正答率、難易度を基準に判断され、良問がプールされた。これまでに、およそ8000題が本番に備えている。

C B T試験では、合計310問の多肢選択問題が、学生ごとにランダムに出題される。つまり、「隣の学生とは出題内容が違う」ということだ。同センターによれば、「薬学生としての最低限必要な専門知識、および実務実習に出る前に最低限必要な知識が対象。従って、普段の学習をしっかりとっておけば、特別な準備をする必要のないレベルの問題が出題されることになっている」とのこと。

一方のO S C Eは、学習者の基本的な臨床技能および態度を、客観的に評価するために開発された評価方法で、「実地試験」「模擬患者が参画したシミュレーションテスト」に相当する。実施に向け、各大学ではO S C Eが独自に実施できるよう、施設整備が一斉に整いつつある。O S C E試験問題は、全国の薬学系大学の教員と現場薬剤師の協力により、共通候補課題が作成された。候補課題は各大学でトライアルを実施し、実証・修正された後、多数の課題がプールされた。試験の実施や評価の共通マニュアルを作成し、各大学で均質な本番の試験ができるように準備が整えられつつある。

市川厚理事長のコメント

薬学共用試験は、薬剤師資格のない学生が臨床現場で参加型実習を実施するために、事前に学生の適性を、各大学が責任を持って適切に評価する試験です。薬学では、先に、教育内容の充実・改善を検討し、薬学教育モデル・コアカリキュラムと実務実習モデル・カリキュラムを作成し、授業に使用しています。来年度から始まる参加型の実務実習において、学生が臨床現場で患者さんと接して実習を行うことは、薬剤師マインドの醸成とその後の学習向上において、計り知れないほどの効果を期待できます。薬学の学生、教職員のみならず、薬剤師をはじめ医療関係者、国民のみなさまにおかれましては、薬学教育における実務実習の意義と共用試験に、格別のご理解を賜りますよう、なにとぞよろしくお願い申し上げます。



O S C Eでは、試験の性質上、実施に当たって、各大学の施設において、いくつかの小部屋（ステーションという）が準備され、受験生はそれを順に回って、課題表に示された項目を定められた時間内に実施することになる。試験は5領域、6課題について実施される。5領域とそれぞれの課題は次のようなものだ。

- ①患者・来局者応対：薬局患者応対、病棟での初回面談、来局者応対
- ②薬剤の調製（1）（2）：計量調剤（散剤）、計量調剤（水剤）、計量調剤（軟膏剤）、計数調剤（錠剤・外用剤）
- ③調剤監査：調剤薬監査
- ④無菌操作の実践：手洗いと手袋の着脱、注射剤混合
- ⑤情報の提供：薬局での薬剤交付、病棟での服薬指導、一般用医薬品の情報提供、疑義紹介

O S C Eの実施に当たっては、多くの模擬患者と評価者が必要となる。現在、模擬患者は各大学が責任をもって育成中。評価者は実務経験のある教員が主となり、実務薬剤師の協力を得て行うことになっている。評価基準は、全大学共通のマニュアルとしてセンターが作成した。

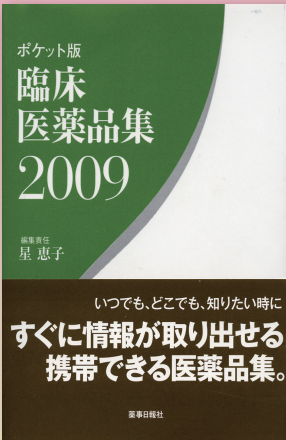
国試とは異なる共用試験の実施主体は共用試験センター（市川厚理事長：武庫川女子大学薬学部長）。実施に当たっては、薬学共用試験センターからネットワークを介し、電子的に各大学に問題が送られ、それぞれの大学で試験を行う。センターからはモニター員が派遣され、試験会場での適切な試験の進行を見守ることになっている。

試験成績はセンターで整理された後、大学にフィードバックされる。各大学は学生個人の共用試験の可否の判定をすると共に、大学で実施する個別の成績評価とを組み合わせ、臨床実習前の総合的な評価とし、学生の参加型実務実習についての最終的な責任を持つことになる。

大幅に見やすくなり、内容もグレードアップ!!

ポケット版
臨床医薬品集 2009

好評発売中



編集責任 星 恵子
（昭和薬科大学薬物治療学教授、
聖マリアンナ医科大学難治研客員教授）

A6判（ポケットサイズ）2色刷り
1,046 頁 定価 4,200 円(税込)

薬事日報社 <http://www.yakuji.co.jp>
書籍注文専用 FAX 03-3866-8408